

風刺とはどういう意味か

2015/1/15 須田 稔

1月14日付『毎日』の「社説」は「パリ200万人行進」が論題で、主張は「暴力許さぬ連帯示した」である。

フランスの週刊紙『シャルリーエブド』襲撃などで17人が殺害されたテロ事件への抗議と犠牲者追悼で、フランス全土では史上最多の約370万人が街頭に出たという。欧州中心に世界各地で反暴力の街頭行進が行われたのは、9・11後のブッシュ大統領のアフガニスタン攻撃を前にして以来だ。

このテロ事件を誘発したのは、イスラム教の預言者ムハンマドの風刺画を掲載した週刊紙であった。

大規模示威行動は『表現の自由』を暴力で襲撃したことへの憤りの表出だ。「いかなる権威にも屈しない」「表現の自由」はフランス革命以来のフランスの建国精神の根幹ともいえる重要な価値観だ」と「社説」は述べる。

他方で、ムハンマドを崇敬してやまないイスラム教徒は、この風刺画を「ムハンマドへの冒瀆」、「イスラム教への冒瀆」と受け取っただろう。

「風刺」とは「遠回しに社会・人物の欠陥や罪悪などを批判すること」であり、「風刺画」とは「社会または個人の過失・欠陥・罪悪などの風刺を目的として、機知的・冷評的に描かれた絵画。カリカチュア。ポンチ絵。」これは『広辞苑』の解説。

白川静の『字通』では、「諷刺」は「それとなくそしる」。「そしる」は「悪しざまにいう。わるくいう。非難する。けなす」と『広辞苑』。英語の SATIRE の日本語訳は「諷刺・皮肉・あてこすり」。

諷刺画家ルース氏は記者会見で、「表現の自由は条件や制限がついたものではない」と述べ、諷刺やユーモアへの理解を求めた、という。「テロの実行犯は、ユーモアが欠如している。私たちは人びとの知性を信じる。ユーモアの

知性を信じる」と結んだ(『毎日新聞』14日付夕刊)。「ルス氏は会見中、反対意見や批判を受け止めるユーモアの精神の重要性を繰り返し説いた」。

他方、「エジプトでイスラム教の解釈を示す政府機関ファトワ(宗教令)庁が13日、「15億人のイスラム教徒に対する挑発」と非難を表明するなど懸念の声が広がっている」とも報じている

イスラムを国教とするパキスタンやイランでは、預言者ムハンマドや聖典クアールーンを侮辱すると、冒瀆罪に問われ、死刑を宣告される。だから、襲撃事件を起こしたクアシ兄弟を「殉教者」と讃え「クアシ兄弟万歳」と叫び氣勢を上げる集会も行われている。

他方、「アラブに死を！」の落書き、イスラム教徒が乗る自動車を銃撃する、イスラム礼拝所モスクに爆弾を投げ込む五〇件、脅迫状を送りつける三三件、などイスラム教と教徒への暴力沙汰が頻発している。

状況はイスラム教への憎悪と暴力の広域化、これに対する反「反イスラム」寛容行動、イスラム過激主義に反対する行動。宗教対立で信仰上の価値観対立の抗争だ。

問題の「風刺画」を目にしないから、搔痒搔痒なのだが、諷刺は抑圧者を被抑圧者が行うときに喝采されるのであって、抑圧者側が被抑圧者を諷刺するのは、パワハラであり、弱いものいじめでしかないのではないか。ルス氏は、イスラムを蔑視しイスラム教徒を侮辱してもかまわないと思う人なのではないか。9・11以後、「イスラム」は欧米社会にとって敵対的文化と見なされてきた。その認識は政府や企業の影響を受けている。

ヘイトスピーチ演者Aが、その憎悪の対象者Bによる反撃で傷害を負った場合、Bに刑法上の罪はあるが、Aに道徳的罪があるのではないか。物理的暴力の行使は許せない。と同時に言辭的暴力・文化的暴力もゆるせない。